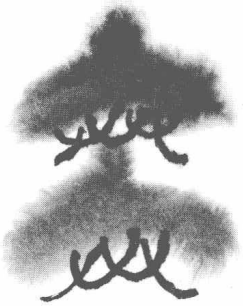
功名が辻 下

司馬遼太郎

功名が辻 下

司馬遼太郎

文藝春秋



功名が辻 下

昭和四十九年五月十五日改訂第一刷

著者 司馬遼太郎

発行者 樫原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三
電話 東京 二六五—一二一一
振替口座 東京 七八七四三番

印刷 図書印刷
製本 矢嶋製本

万一、落丁乱丁の場合はお取り替え致します

© RYOTARO SHIBA 1974 Printed in Japan

功名が辻 下

装幀　村上　豊

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

虫売り

千代は、ときどき侍女を一人かふたりつれて、東山の諸大寺や北野天神、東寺などに物詣に出かける。

信心というほど大げさなものではなく、いわば社寺にかこつけての町歩きである

この秋のある日、清水寺に詣でた。

そのかえり、ふと参道をみると、楓の大枝三本を地にたてて、むしろにすわっている物売りがある。

「あれはなにを売っているのか」

と侍女にささやくと、虫売りだという。

なるほど、楓の小枝々々に、小さな虫籠をつるし、そのなかに松虫、鈴虫などを入れている。

「二籠ばかり、買いましょう」

と、侍女を走らせた。

侍女が青銭を出して買いもとめると、その虫売りが、茶の煮しめたような猿投頭巾の頭をかるくさげた。

「ありがとうございます。あの御婦人は、山内対馬守様のご簾中でございまするな」

「えっ、お前はたれなのです」

と、侍女がおどろいた。

むりもない。千代のこの日の行装は市女笠をかぶり、虫の垂れぎぬをたれ、顔はなかばしかわからない。その垂れぎぬをとおして、この虫売りは言いあてたのである。

「あやしきものではございませぬ。六平太、とおっしゃってくだされば分かります」

侍女が千代にその旨を伝えると、千代もおどろき、眼をほそめて虫売りを見た。

六平太といえば、むかし、伊右衛門が織田家の下級将校であったころから唐国で千石を頂戴したころまでのあいだ、屋敷に出入りしていた甲賀者ではないか。

「望月六平太ですね」

千代は微笑しながら、歩みよった。

六平太は、おじぎもせずに、にこにこ笑っている。すこし年をとったせいか、むかしとは人変りしたほどに好

人物な人相になっていた。
「そなたは、なにをしています」
「ごらんのとおり、虫売り」
「しかし、忍びは」
と千代がいいかけたとき、六平太は、大げさな身ぶりで、
「しっ」
と自分の唇に指をあてた。
「むかしのことは言いっこなしでございますよ」
「それでは、いまはただの虫売り？」
「さあね」
あいまいに微笑したのは、なかなかそんな単純ななりわいではないらしい。
「虫籠をお二つとは、おそらくお拾様と国松様のためのものでございましょう」
と六平太は容易ならぬかんを働かせた。
お拾、とは以前にふれた。長浜のころ門前にすてられていた子で、その後十歳のときに花園の臨済宗本山妙心寺に入って得度し、のちに同山でもなりひびいた若い禅客になっている。

国松、というのは、遠州掛川城の留守居をしている伊右衛門の実弟修理亮康豊の子で、まだやっと数えて五つになったばかりであった。伊右衛門、千代がもらいうけて養子として伏見で養っていた。
が、このふたりは、六平太が出入りしていたころにはむろんいなかった。
虫籠二つ、ときいてすぐその二人を連想した六平太のかんは、あいかわらずするどい。
（やはり、虫売り渡世ではあるまい）
千代はおもい、いちど屋敷をたずねてくるように言ってきかせた。

六平太が伏見屋敷に訪ねてきた。
千代が清水寺で遇ったその翌日である。老臣の深尾湯右衛門が、そのよしを千代に告げた。
「どのような姿で参っています」
と千代がきくと、湯右衛門が、
「左様でござりまするな、まず五百石取りの風体にて若党に槍をもたせ、馬一頭を口取りにひかせ、家来、小者あわせて供は五人、というこしらえでござりまする」

（ホホ、六平太めはやる。どうせ、化けた姿でありましょう）

と千代はおかしかった。

書院で引見すると、なるほどりっぱな武士である。

千代は人払いをし、侍女たちが去ると、

「六平太、そのご様子はどういうなぞなぞですか」

とからかってやった。

六平太は、にやにや笑っている。連れてきた家来などもどうせこの男の仲間の甲賀者なのであろう。

「浮世をかように茶化してくらしております」

「その茶化した浮世師の六平太にお金をくれて仕事をさせるひともいるから、世の中はおもしろいことです」

それはたれか、と千代はきかず、

「あれから、どうしました」

と、まず昔ばなしから問いはじめた。

「さる西国の大名にお仕え申し、さまざまと上方の御用をつとめ、こんにちにいたっておりまする」

「さる大名とは？」

「毛利家」

と六平太は声をひそめていった。言ってからおどけて口をおさえ、

「これはつい、憚りあることを申しました。御台所さまには、六平太はいつもこのように軽口になりまする」

といった。六平太は、むかしから千代をひそかに慕ってきたような気配があった。だからこそ、むかし山内家がまだ家格も卑しかったころ、頼まれもせぬのに諸国の情勢などを教えてくれたのであろう。あのころは、この男は山内家に出入りしつつ、実は織田家の敵方である近江浅井家の用をつとめていたようすであった。

「御台所さまには、それがし、かげながらときどきお目にかかっておりまする」

「わたくしはちっとも知りませぬ」

「左様でございましょう。露顕するようではわれわれの稼業はつとまりませぬ」

六平太はしばらく黙ったまま微笑をさざなみ立たせていたが、やがて、

「ところで」

といった。

「虫は生きておりますか」

「よい音で鳴きます。そなたは見るごとに化けますが、

あの虫だけはほんものらしい」
「ところで」
六平太は、この男のくせで、顔をつるりとなでた。
「それがしに御用はありませぬかな」
「ない、ない」
千代は笑っている。察するところ、六平太は毛利家の用をつとめつつ、なにか千代への好意で当家のためにも役に立ちたいらしい。
「そろそろ、世の中が」
と六平太はうれしそうにいった。
「それがしのような男の役立つ時勢にもどって参りましたようで。ここ数年のうちに、天下がひっくりかえるようなことがあるかもしれませぬ」
その日、伊右衛門が下城して部屋にくつろぐとすぐ、千代は六平太のことを報告した。
「なに、六平太が？」
伊右衛門は、あの男が鬼門であった。あの男だけが、むかし、京の空也堂で思わぬ縁をむすんだ小りんとの事を知っている。
伊右衛門のたったひとつの情事であったといっていい。
（伊吹山で最後に別れたとき、六平太は小りんのその後のことを物語っていたな）
と思いだすうち、脳裏に染めあげたように小りんの貌、髪、肢態が思いうかび、頬に血の色がさしのぼった。
「どうなさいました」
千代は、伊右衛門の様子をふしぎそうにみている。
「いや、なんでもない」
「それならよろしうございますけど」
「それで、六平太はどう申していた」
と伊右衛門はあわてて本題にもどった。
「なにやら、世の中がそろそろ騒がしくなってきて、数年のうちに天下がひっくりかえるかもしれない、と申しておりました」
「あれはあの男の稼業だ。流言を放ったり、他家の様子をうかがったり、ときには町に火災をおこしたり、いずれにしても乱がおこるのを待っている。あのような者の言葉をいちいち耳にとめることはあるまい」
「でも」
と千代は、むかし六平太についていったことばをくり

かえした。
「あのような者も、役に立つものでございます。むかしどおり、当家に出入りをおゆるしになりましたら？」
「あれは出入りをゆるすゆるさぬではない。来たければこの畳の下からでも這い出てくる男だ」
「害はありますまい」
「千代は人を信じすぎる。もしわしの寝首でもかかれたらどうする」
「ホホ……」
寝首をかかれるほど、豊臣政権のなかで重要な大名でもあるまい。律義いちずの対馬守殿、となかば馬鹿にしたような蔭口を殿中でささやかれている亭主である。
「ひとは、こちらから信じきって接してやれば、たいていの悪人も、その善い面のみで応えてくるものでございます」
「もし裏切られたら？」
「そのときはこちらの不料簡でございますもの。あきらめねばなりませぬ。六平太は毒物かもしれませぬが、毒物でないと薬にはなりませぬ」
「なるほど」
伊右衛門は、素直にうなずいた。
「で、六平太は忙しそうか」
「どうやらかの者の口うらではしばらく中国筋などにいたようでございますが、去年あたりからまたまた京、大坂に出てきたらしうございます。ああいう者が、虫売りに化けたり、馬をひかせて御槍を立ててゆく武士に化けたりするようでは、この伏見城下もそろそろ、底の流れはただごとでなくなってきた証拠でございましょう」
「太閤殿下のお身になにかあるのかな」
「御典医のかたがたに秘密のわたりをつけてお体のご様子など、手にとるように知っている様子でございました」
「ご寿命は？」
「あと数年、というような、恐れもなきことを申しておりましたが、もし万一」
「そう、もし万一」
どの大名も、それを気に病んでいる。もし万一、太閤の身に異変があれば、豊臣政権はどうなるのか。おそらく、崩れ去るであろう、というのは京わらべでさえそう見ていた。

この年閏七月十三日、といえば西暦でかぞえると九月五日だが、千代のいる伏見方面にすさまじい地震がおこった。

どういうまわりあわせか、六平太が訪ねてきてなにやら予言めかしいことをいった翌日のことである。

おこったのは、深夜の午前二時。むろん千代は寝所にいた。

（あっ）

とびおきたときは、伊右衛門が千代の腕をつかんでくれていた。

「千代。――」

叫びながら伊右衛門はころんだ。千代がその上に折りかさなった。

建物が鳴りわめき、轟っ、とついそばの建物が崩れおちる音がきこえ、やがて地に吸いこまれるような衝動を感じたかとおもうと、

ぐわっ

と持ちあがり、さらに沈んだ。その瞬間、天地がくずれ去ったかとおもわれた。二人は建物の下になった。さいわい、怪我はない様子であった。

千代は泣いている。

「一豊様、地震でございます」

「地震はわかっている」

「でも、地震でございます」

「千代、気をたしかにもつことだ」

伊右衛門がもてあますほど、千代は度をうしなっていた。長浜の地震でよね姫をうしなっていらい、千代は地震ほどこわいものがなかった。

地がなお激しくゆれている。

「国松殿、国松殿」

千代はあがきながら叫んだ。

五つになる養子の国松は世子として育てられているから、別屋で乳母などとともに住んでいる。

「千代、泣くな」

「でも、こわい。――」

千代は、童女にかえったようであった。

伊右衛門はこれでも、当代きっての合戦の場かずを踏んできた男だから、地震という異常に遇っても驚きはすくない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

千代の頼りなさ。
（おどろいたな）
わが妻ながら、こんなに女とは可憐なものか、と伊右衛門は千代のとりみだしようを観察するゆとりがあった。
「千代、わしがついておる」
「長浜では、一豊様はいらっしゃいませんでした」
いまさら恨みがましくいう。
「あのときは、京で御用があった。いまは千代のそばにいる」
「二人きり」
千代は、伊右衛門がばかばかしくなるほど甘ったれてきた。
「おお、二人きりだぞ」
「家来もない」
千代は、急に心にゆとりができてきたらしく、いつもの笑顔でくすくす笑った。
「なんだ、もう笑っているのか」
「でも、こうしていますと、家来もなく侍女もなく、もとの二人きりにもどったようでございますもの」
「ああ、そのとおりだ。権勢富貴などは地が一震すれば無になるものだ。いまおなじ大地で太閤殿下も揺れている。江戸内大臣殿（家康）も揺れている。みな裸か身で揺れておるわい」
「手を、しっかり握ってくださりませ」
また、激しい震動がやってきた。
地が、波の間の舟のようにゆれた。

この伏見大地震は、幕末の弘化四年三月二十四日の信州善光寺平でおこった地震とならんで、明治までの日本史上、最大の地震であったとされている。
地震の中心は、伏見鳥羽あたりで、被害はいまの京都府南郊、大阪府などにもおよび、建立早々の京の方広寺の大仏殿も倒壊した。
余談だが秀吉はあとで、この六丈五尺の大仏がもろくも崩れ去ったことをいかり、
「汝は、鎮護国家のために建てられていながら、鎮護国家どころか、おのれの身も守りえざるか」
と矢を射させたという。
この方広寺の大仏は、のちに「国家安康」の鐘銘をいいがかりにして家康が大坂の陣をはじめた事件で有名で

ある。

徳川初期の寛文三年にまたまた地震があり、方広寺大仏はふたたび「わが身さえ守りえず」くずれ、徳川幕府も、

「世にこれほどの無用のものはない」

として鋳つぶし、一文銭を鋳造し、世に流通させた。

とまれ、伏見地震。

伏見、京ではほとんどの社寺、屋敷、民家は倒壊し、圧死者は数が知れなかった。

最大の崩壊は、秀吉の伏見城であろう。

城門、櫓、殿舎だけではない。天守閣が一瞬にしてくずれ去ったのである。

世に有名な「地震加藤」の逸話があったのも、この夜であった。

この夜、加藤清正の伏見屋敷も、大書院が倒れ、厩舎から火を発したが、清正ははねおきるなり腹巻をとって身につけ、柿色手拭で鉢巻をしめ、白綾の地に朱文字でもって南無妙法蓮華経とかいた陣羽織を着し、上帯に赤銅づくりの大小をさし、八尺あまりの鉄棒を小わきにかいこみ、

「われにつづけ」

と、ゆれる大地を駈けて伏見城にむかった。

つづく者は、森本儀太夫、木村又蔵、井上大九郎、加藤伝蔵、小代下総、大木土佐など物頭三十人、それに足軽二百人。物頭には手槍をもたせ、足軽にはてこや六尺棒をもたせた。

清正は、朝鮮八道に武威をふるったが、秀吉の機嫌に触れ、いまは閉門して謹慎している。

（当夜こそ、上様の誤解をとき、ご不興をなだめねばならぬ）

とおもったのであろう。

大手門はすでにくずれており、城内に入ると殿舎、楼閣は崩れ、その下に悲鳴をきくのみであった。

清正、さらに駈けまわって本丸にあがると天守閣もない。

（あわや、殿下は梁の下にやなり給いし）

と尋ねさがすうち、ふと塀中門をおしひらいてみると、庭園がある。築山のあたりに大提灯をかけ、屏風をひきまわし、上臈二十人ばかりとともに女装してうずくまっているのが太閤であった。女のかつぎをかぶっていたのは、異変につけこんで自分を害し、政変をおこそうとす

る者を怖れたのであろう。
秀吉のわきに、北政所、松ノ丸夫人などがいる。
「虎之助、早や来たるや」
と、もともと清正びいきの北政所がよろこびの声をあげ、秀吉もこれに和した。
千代が、伊右衛門と自邸の梁の下にいたころ、城内ではそんな挿話があった。

とにかく、すさまじい地震だった。余震が、その後、五ヵ月つづき、京、伏見はたえずゆれているようなあんばいで、庶民の不安はただごとではない。
例の伏見くずれの日からひと月ほどして望月六平太が、虫売り姿でやってきた。
門前で、
「六の字でござりまする、深尾様はいらっしゃいまするか」
とさえいえばこの男は、千代の手配りで山内屋敷には自在に出入りできるようになっている。
屋敷は、まだ仮屋だった。
千代は庭さきにまわるように命じ、自分は縁側まで出て、話をした。
「地震のときは、どうしていましたか」
「へい、この姿でお城下を逃げまどうておりました」
と、虫売りらしい屈託のなさで笑った。この男は、地震といっても失うものもない気楽な身なのである。
「ところで、お買いあげくださいました虫はぶじでございましたかな」
「そうそう」
国松が持っていた虫籠はつぶれて松虫が逃げてしまいました、と千代はいった。
妙心寺の拾に送った虫籠は、あとで使いを走らせて様子をきくと、妙心寺の堂塔がぶじだったためにまだ元気であった。
「されば、これと取りかえましょう」
と、六平太は、あたらしい虫籠を千代のそばに置いた。松虫が二ひき、入っている。
「六平太どのがとってきたのですか」
「へい、宇治の山で。採って飼いそだてていると可愛ゆくなるものでございますな。さしあげるにしても、名残り惜しいような気がいたします」

「存外、心のやさしいこと」
無駄口をたたいているうちに、六平太は、顔かたちをあらためて、
「だいぶ、百姓どもは窮迫しておりますな」
といった。
そうですか、と千代はくびをかしげたが、その窮乏は千代には十分察することができる。
秀吉は、老来、英雄の気がうせ、巨大な浪費だけが残った。
朝鮮出兵中にもかかわらず、やたらと普請をおこし、飽くことを知らない。むろん、自分の財をつかうのではなく、諸大名に手伝わせるのである。
諸大名はその費用を捻出するのに、自分の領民をしぼりあげるしかない。民力は極度につかれはてていた。
当時、伏見城下に朝鮮の捕虜で姜沆という学者があり、伏見城下で木下長嘯子やまだ僧侶時代の藤原惺窩と交際していた。
惺窩は、当時ならぶ者もない学者で、家康から禄をうけたこともあった。かれが姜沆にいったという時勢批評が、姜沆の著書「看羊録」に出ている。

「いまほど、日本の生民が窮迫しているときはない」
と惺窩はいい、
「もし朝鮮が大明軍とともに日本を征服しようというなら、いまをおいてない。日本に上陸すると同時に日本の降伏兵をして日本文で高札をかかせ、われわれは日本人を窮乏から救うのだ、という趣旨を徹底せしめ、かつ軍の往くところいささかも軍律を犯さしめなかったならば、日本人はよろこんで、軍に参加し、たちまち奥州白河まで平定することができるだろう」
とまでいったという。
そういう学者まで出るにいたっている。
とくに地震以来、秀吉の政権が、もはや浮きあがりつつあることを、千代も察していた。
その年も暮れようとしているとき、いったん休戦状態にあった朝鮮の役が、ふたたび開始される情勢になった。
年があけて慶長二年二月二十一日、秀吉は朝鮮再征部隊を部署した。
先鋒は、あいかわらず加藤清正と小西行長のふたりである。

「わしは、また京都留守居だ」

と帰邸して伊右衛門はいった。

理由は、伊右衛門が軍人として不適格であるからではない。すべて東海道に城をもつ大名は、内地警備なのである。

むろん朝鮮に対する警備ではなく、関東の徳川家康に対する警備であった。千代がかつて、

——徳川殿封じこめの鍵役でございますね。

といったことがある。伊右衛門の豊臣家における役割りが、そのたとえばなしではっきりしている。

「わしは」

と、帰邸後にいった。

「最初の唐入りに選ばれなんだときは、太閤はわしの武辺をお見かぎりなされたかと不満だった。が、こんどは選ばれなかったことをよろこんでいる」

伊右衛門がそういうとおり、渡海する諸将は暗い。なんのために戦うのか、というかれら自身の理由がなかった。

この時代の武将というものは、いかに戦国風雲のなかから生き残ってきたとはいえ、戦う機械ではない。

十数年前、羽柴筑前守といった秀吉を押し立てて山城の山崎で明智光秀を討ち、近江賤ヶ岳、越前北ノ庄で柴田勝家をほろぼし、西は九州へ遠征して島津氏をうち、四国の長曽我部氏征伐のために長途の行軍をし、東は北条氏を討ち、はるか奥州までかれらが遠征したのは、すべて秀吉を押したててゆくことによって自家の繁栄をはかろうがためであった。

それ以外に目的はない。

が、朝鮮、明国と戦さをして、いったいどういう利益が自家にもたらされるというのか。

ない。

といっていい。

最初の唐入りのときには、まだしも大明帝国を切りとって領土にするという秀吉の野望を、根っから信じている武将もあった。

が、こんどはそういう野望が、一場の痴人の夢にすぎぬことを知っている。

秀吉の一片の壮気のために諸大名は戦わねばならないのである。

しかも、戦争に関するすべての費用は、当然なことながら、出征大名の自己負担であった。かつ、武功をたて

た家来への恩賞も、諸侯は身銭をきらねばならない。
（まじめにはやれぬ）
という厭戦気分が、最初からある。この厭戦気分こそ、豊臣政権への痛烈な無言の批判なのだが、天下で秀吉だけが気づいていない。
十三万の出征軍は、上陸するとほんの数ヵ月で朝鮮南沿岸地方の諸城を占領した。
が、かれらは沿岸から離れない。遠く帝都京城をつくことをせず、かきのように沿岸にはりついて守勢をたもった。
というのは、京城への満足な道路がないのと、京城付近の農村は荒れに荒れて農民は餓死寸前にあり、たとえ京城を占領してもそれほどの大部隊を養えなかったのである。
いずれにせよ、千代は、自分の夫がそういう愚劣な遠征に加わらなかったことに幸福を感じていた。
（どう成り行く世なのか）
千代は、毎日、そのことを思うと暗然としてくる。
このところ、伏見の大小名の屋敷では、天下の後継者である秀頼の話題が出ぬ日、というのはない。
秀頼は、数えて五つ。
この幼児自身の言動の可愛さ、才智などがまきちらす話題ではない。
幼児の秀頼が利口なのか、どうか。
千代にはよくわからなかった。おそらく日本中のたれもが、よくわからなかったであろう。
千代なども、
「秀頼さまは、どういうかたでございましょう」
と伊右衛門にきくが、何度も大坂城の御殿でおおぜいの大名とともに拝謁おおせつけられている伊右衛門も、
「さあ。……」
とくびをひねるだけで、よくわからない。
殿中ふかく、風にもあたらぬように、真綿ぐるみ、金銀ずくめで育てられている、というかっこうなのである。
子供らしい生活などは、秀頼には皆無であったであろう。
なにしろこの若君は、のち大坂夏ノ陣で没した二十三歳のころには、色白で背高い美丈夫でりっぱな青年になっていたが、遊びで人里に出たというのは、多勢の侍

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com